

用言の発展

折口信夫

青空文庫

われ／＼は常につくろふとかた／＼かふとかいふ所謂延言の一種を使うて居つて何の疑をもおこさぬ。今日の発音ではつくろふもた／＼かふも、みな終止形はおの韻をもつたら行長音なりか行長音なりになつてしまふのであるから疑のおこらぬのも尤である。けれども仮字づかひについて考を及してみるとどうもをかしい。なぜつくろふのろはrofūでかたらふのろはrafūなのか、どういふわけであらうかふのこはkofūでかたらふのこはkofūでなければならぬのか、妙な事だといふと常識はたゞちにかう応へる。

その疑は今日の発音を土台として考へるから起るので、昔はつくろふをtukuro-fu、かた／＼をkatara-fuと発音したからである、またた／＼かふはtataka-fu、か／＼はkako-fuと発音通りにうつしたのにすぎないとこたへる。けれども疑はその点ではない。形容詞や動詞をとつて考へてみると、

くや・し	うらやま・し	あぶなか・しい	あら・し	やさ・し	た／＼は
・し					
べか・し	めか・し				
うごか・す					

さか・る　　こが・る　　まか・る

などのごとく動詞形容詞助動詞すなはち用言の将然段又はあの韻を以て終つて居る語から他の語につゞいてまた用言になつたらしいものがあるかとおもへば、一方には用言の終止段から他の語につゞいて同じく再びある用言を形づくつたらしく見えるものがある。

いつく・し　　いきどほろ・し

おそろ・し　　さも・しい

うごも・つ

おこ(くく)・す　　つも(くむ)・る

こも・る　　なゆ・ぐ

などが即ちそれである。然るに、をかしい事が此処にある。それは、意味も形式も殆ど同じ語で、将然言から出たのも終止言から出たのも二つともにあることである。

よそはし||よそほし

このまし||このもし

くるはし||くるほし

よろこはし||よろこほし

きか・す||きこ・す　おもは・す（敬）||おもほ・す　おは・す||おほ・す

とゞろか・す||とゞろこ・す（古事記、岩戸びらきの条）

人はこれらの終止段から出たらしい語をば悉くあゝの韻がお（即ちう）にうつゝた音韻の転訛であるといふけれども、それでは何やら安心のならぬ所があるやうにおもふ。その不安心の点を出発地として、下のやうな推論がなりたつた。

自分のよんだ限りの少しばかりの諸先達の著書のうちには、これこそとおもはれる考がなかつた様に記憶する。大抵やはり将然段から出たものとして、よそほしとかおもほすとかは音韻の転訛であるとやうにとかれてゐる。こゝに卑見をのべるに先だつて、まづある提言をなすべき必要を認める。それは「用言の語根は体言的の意味あひをもつてゐる」といふことである。全体体言といふ名称は形式の上にあるのではあるけれど、こゝには名詞と^いうてしまつてはしつくりとをさまらぬから、かりに意味の上^にこの名称を借用した。

語根が体言的の意味あひをもつてゐるといふと、こゝに自然と名詞語根説と語根名詞説とが対立してくる。即ち歌とうたふとは何れが先に存してをつたかといふ争がもちあがる。自分は名詞語根説を把るから、勿論歌がもとで、うたふは後になつたのであると答へる。

けれども反対者の説く所にも理由のあることは認めてをる。然しそれが誤解であるといふことを少しばかり論じてみようとおもふ。

かなし・む　　そゝ・る　　かこ・む　　いこ・ふ　　しづ・る

などの語によつてみても名詞語根説が語根名詞説よりもまさつてゐる事は明かである。

かなしむは形容詞から来たもので誰もかなしむからかなしといふ語が出来たとはいふまい（このかなしむのかなしは体言である事は後にいふ）。そゝるのそゝ、よゝむのよゝなどは擬声といふのか、擬状といふのか、ともかくも八品詞以外のやゝ感嘆詞に近い語である。これを体言的（意味上の）に借用して、むとかるとかいふ用言にうつす接尾語をつけたのであつてみれば、誰しもそゝ、よゝはそゝる、よゝむの語根から出たのだとは主張すまいとおもふ。ましてそゝのかすとか（そゝめくとか、そゝや秋風などのそゝは、これとは少し系統がちがふ様である）よゝめく、よゝなくなどゝいふ語があつてみれば、そんな議論はおくびにも出る筈のものぢやない。かこむ、しづるなどは次に示す簡単な表をもつても、語根名詞説を破るだけの材料をもつてゐる。

「——（釣錘）

「——枝

る
かく
ふ

ト

す

む
む (こむ)

や
や (やか)

ト

か

る

む

く

しづト
みや (出雲国造神賀詞に志都宮忌静仕奉)

おり

ごころ

輪
鞍

「——やか

しづむ静心なく花のちるやらんと解してゐる。然しこれはよろしくないと助動詞らむ静心なくては理屈におちておもしろくないといはれたが、先生の解釈の方がなほ、理屈におちて趣がない。少しわき路にはいるけれども、この時代の歌にはかういふらむしたとしてはよろしくない。それかというてしづかでは勿論わるい。しづく、しづる、しづむなどに共通した下にしづむ様な心もちがあるのである。しづか、しづや（やか）は、もとやはりしづむやうな心もちのしづにかまたはや（やか）がついたものであらう。催馬楽に、しづや男といふ語が見える。これは物に動ぜぬ沈着な男であるのだといふ。このしづかとかしづや（やか）とかいふ語が多く用ゐられたから、そこではじめてしづといふ語に静といふ意が生じたのであらう。

つけていふが、賤男、賤の家などのしづは今はないけれど、古い動詞の一つにちがひない。かき（垣）といふ語が今もなほ連用名詞法の倂を存してゐる。祝詞によくでる「あめのかきたつかぎり」のかきとでも訳すべきで外と境をたてる意がある。

かくす、かくむ、かこぶ、かくるは、このかくといふ体言的の語があつて後に出来た語である事はいなまれぬ。

かづら・ぐといふ語についても同様の事がいはれる。かづら（鬘）といふ語があつてのちはじめて出来る筈の語で、決してかづらぐから鬘がうまれたとはいふことが出来ない。その外かた・ぐとかはら・むとかちか・ふ（ちかごとなどいふ）、うら・ふ（うらなふと意殆ど同じい）、あが・ふ（あがなふと意殆ど同じい）、あぎと・ふ（魚のあぎと・ふをいふ。あぎとをはたらかしたもの。童児のあぎとふはあきと・ふである）とかいふ語を見ても、かたぐから肩、はらむから腹、ちかふからちか、うらふ、うらなふから占あがふ、あがなふから贖、あきとふから顎などが生れたとは決して考へることはできない。

尚数行いひそへておくが、語根名詞説が正しくて名詞語根説が誤だと主張する論者に次の現象について説明を促さうと思ふ。

(一) たしかに体言といふべきものであつて、ある接尾語をよんで用言となる理由はどうであるか、即ち、

あき・なふ（あきじこり、あきうど）

音・なふ まか・なふ（まかだち）

まひ・なふ（わかければ道ゆき知らじまひはせむ下べの使おひてとほらせ 憶良）

荷・なふ　　甘・なふ　　まじ・なふ（まじ物、まじこる）

等のなふ

たゝ・よふ（たゝふ、たゝはし）

不知イサ・よふ　　もこ・よふ（むくめく、むくくし）

等のよふ

さき・はふ　　わさ・はふ

いは・ふ（いは忌、即ちゆには、ゆゝしのゆと関係がある）

種クサ・はひ（ちぐさ、くさ／＼）

味・はふ

等のはふ

ちり・ぼふ　　よろ・ぼふ　　き・ほふ

等のほふ

たゞ・し（正といふ名詞は動詞にたづぬがあることから思ふとたづといふ語があつて、

恐らくはその名詞法なのであらう。それにしへしく形がついたのである）

ひさ・し（見ずひさに、ひさにふる）　　これ・しき（これしきもの）

もの・し　ものく・し　おほやけく・し

女・し　おとな・し　われく・しき。(我々しき分際)

こまいぬ・しく。(狛犬らしくである。枕草子に二ヶ所見えて居る。但し関根先生は狛犬獅子也といはれたけれど、なほ次のくまくしくなどからみると狛犬しくであらう)

くまく・しく(きはやかならぬこと。夕顔に、こゝかしこのくまくしくおぼえ給ふにものゝあしおとひしくとふみならしつゝ)

等のし

なが・らふ(ながるの延と称せられるながらふではない)

等のらふ

その外

めく(とき・めく、うご・めく)

つく(がさ・つく、うろ・つく、そは・つく)

がる(まろ・がる、くら・がる、ひろ・がる)

がる(いやがる、かなしがる)

かふ く(ぐ) す(ず) つ(づ)
ぬ む ふ(ぶ) ゆ る う(得)

等の接尾語がついて動詞をつくるのはどう説明するのか。

(二) かれ・す つき・す しに・す

などのかれ、つき、しには動詞の連用名詞法でなうて何であるか。

(三) 料理がれうる、装束がしやうぞくと動詞になり、おはもじ(はづかしいこと)、

ひもじが、おはもじい、ひもじいと形容詞になるのはどういふものか。

(四) わかやか やはらか すみやか など、

わかやぐ やはらぐ すみやく など、は、どちらが前に出来たかなど、いふ事は別として、やはらかのら(か)、わかやかのやは何のためについてゐるのかといふことについて詳細の説明がききたい。

注意

や、ら、かの説明を求めるにあたつて、自分の立脚地から見たや、ら、かの説明をし
ておく必要を感じる。

やはらかのら、わかやかのや、ほこりかのか、あてはかのは等は、名詞をつくる接尾

語だと考へる。

やは、わか、ほこり、あてなどにはすでに体言的の意はあるのだけれども、完全な体言とはなりをふせぬから、らなり、やなり、かなり、はなりをつけてその体言的の意をや、完全に、名詞になり、形容詞になり、副詞になり用ゐたものとおもはれる。そして尚いふと、単にや、ら、か、はといふ単純な外部から添加した語ではなく、もとくゝ活用のあつた語の将然言であらうと思ふ。これについてはなほ後にいふ所があらう。

古事記上巻の須勢理媛の歌に あやかきの布波夜賀斯多尔、むしふすま古夜賀斯多尔、たくぶすま佐夜具賀斯多尔 とあるそのふはや、にこやは今でいふとふはやかとか、ふはくしたとか、にこやかとかいふべきところであるが、佐夜具といふ動詞が連体名詞法からがといふ互爾波をよんだ如くすぐにふはが下に、にこが下にとしたゞけではものたらぬからやをよんだので、多分これはゆといふ動詞接尾語がついたのが将然にやの形をとつたのであらう。たをやめなどもさうである。古事記あたりに手弱女（天真名井宇氣比の条）と字をあてゝある所からたよわめの転であると説明してゐるけれども、これはむしろたわとかたをとかにやの添はつたもので、女メに対して形容

詞のやうにつゞいたものと見る方が正しからう。一体やとらとは音が近いから、或は音転であるかとおもはれる。たよら（たよや、たよやか）、さはら松風などゝいふ語もある。あてはかといふ語のはは多分あてぶといふ語の將然言ではありはすまいか。今でこそ一つはあてぶといひ、一つはあてはかと清濁の区別があるけれども、それによつて語の系統を無視するわけにはゆかない。

さやぐの名詞法がさやか（「たくぶすまさやぐが下に」は袴袢のさやかなるもとにといふ意味であることは勿論である）である。みやびか、なよびか、ほこりか、にほひかなどのかはやが脱けたものとも、連用名詞法についたものとも思はれる。

尚やが単にやとしてついたのでなしに、ある動詞からうつつたのであらうといふ事は、さゆの名詞法がさやであり、あてぶの名詞法があてはであるといふことによつて稍たしかめられる。

(五) かこ・ふとかしづ・るとかいふ語がかくとかしづとかいふ語より以前にあつたこと、または偶然にかくとか、しづとかいふ語を無関係な数種の語の中に没交渉的にふくんでをつたのであるといふ証明を欲する。

以上おぼろげながら名詞語根説について述べたつもりである。進んで用言の五段について

名詞法を考へて見たいと思ふ。先づ将然言からいふと、

■将然名詞法

この段から名詞の出来ることは亀田先生が先日大学で講演せられた。先生の考では、おやは老ゆの将然名詞法で、緬ふ、鳴るの将然言がなは、なら（屁）となつたのであらうとのことである。この考を借用して敷衍すると、つるの名詞法がつら（列）、つれ（連）で、さゆの名詞法がさや（―に）（―か）で、ちるの将然からちらく、ちら・つくなどのちらといふ体言が出、足玉も手玉もゆらになどのゆらはゆるの名詞法であることは疑もない。全体副詞の語根といふものはみな体言である。用言の将然言が体言となるにはすつかり名詞となつてしまふわけにもゆかないので、体言的な副詞の語根となつて止つてるものが多いことは考へがたくはない。形容詞の語根についてもまた同様な現象をみる。若、高、優ヤサ（―男、―形）、浅、深などもまた動詞の将然言に形容詞接尾語し（し、しく）がついたのである。

若は古動詞わく（文献の今徴すべきものがない）の将然名詞法であつたらうといふことは、わきいらつこ（わかいらつこの音韻の変化ではあるまい）もあればわくごもある。いわきなし、いわけなしもある（いとけなし、いとけなしがい・ときへ分別）なしと考

へられる如く、い・別きなし、い・別けなしとおもはれぬでもないけれど、いとけ、い
ときのいと幼い意〔いと姫君 紫式部日記、いと 京阪地方の語〕をふくんでをつて、
これにけとか、きとかぐついたものと見る方がよからうと思はれるから、これもなほ幼
いといふ意であらう)。い・わ・くは今日存してゐるこの動詞に甚しといふ意をあらは
すなしがついたと考へる方が正当だとおもふ。いが動詞の接頭語となることは、い・ゆ
(行) く、い・き(去) る、い・は(這) ふ(いはひもとほりうちてしまむ 古事記
)、い・の(宣) るなどを見ても明かであるから、わくといふ動詞が実際あつたといふ
ことは疑を容れる余地がないとおもふ。人はおゆが動詞なるに對してわかしが形容詞だ
といふことを不思議がる。動詞形容詞一元論者は一の屈強な拠り処としてこれを採用す
る。けれどもおゆに對してはわかゆといふ動詞がある。わかしに對してはおほしの意の
おしといふ語がある。論理的觀念の乏しかった古人は大きいといふこととわかい(即ち
小さい)といふことを對比したのである。同時にこのおしといふ語はをしも対比せられ
てをる。(おとをとによりて物の大小をあらはした事はいふまでもない。) 或はおしと
いふ様な形容詞はないといふ人があるかも知れぬ。けれども古事記を見ると、おしころ
わけについては古事記伝にこれらのおしを大の意にといてある。橘曙覧はこれを難じて、

大の意なるをおしといふことあるまじく、はたその心ならんには直ちに大字をかゝるべきなり。同じ意なる語に文字を様々にかへてかゝれざる、古事記の文体なればなり。というて押人命、押勝などは押の字を書いてあるから、つまりたけく、勇ましく、威徳の盛なるをあらはしとなへたものである、と、説いてゐるのは考へすぎた説で、やはり紀の一書に熊野忍隅命とあるのが他の一書にはその忍が大の字にかへてつかはれてゐると、凡河内を大河内とかよはして用ゐてゐるのをば根拠として忍と大とが同じであるというて居る記伝の説の方がまさつてゐると思ふ。忍阪は大阪の意味で、大和の磯城郡より宇陀の阿紀野へ出る途に今も半阪というて非常な急阪のある、そのむかし宇陀の阿紀野へ遊獵に出かけた人たちがその阪に命じた名であるのが、終にその下の里の名にうつたのである。

今一つ忍海の角刺宮のおしは、やはりおほし（即ちおほきし）の意味であらうとおもふ。形容詞のおしとみとの間にのといふ亘爾波をはさんだことは恰もうるはしの人、かなしの子といふ如く、或はかみのみ即ち神カンナミ南といふ地名がある様なものである。みは朝鮮語の やまとへにみがほしものは於尸農瀨の此たかきなる都奴娑之能瀨野 とあるのは、その地理をよく説明してゐるとおもふ。また蘇我蝦夷の歌に やまとの飢斯能広瀬をわ

たらむとあよひたづくりこしづくらふも（皇極紀）とある飫斯能広瀬もおしといふ地名ではなくして、大き広瀬の意味である。

※※＞※は山ではあるけれど、わが国では多く小山、岡、たかみの意につかはれて居る。

いまぎなるをむれが上に（齐明紀）。

^{<press style="}培※

倭名鈔には田中小高也とある。

もり（森）。

但し、山の意にも用ゐて居る事もある。紀伊の牟婁郡は山の郡の意であらうし、みよしのゝ小村（をむら）が嶽の類。

わかゆに対してはおゆ、わかしに対してはおしのある筈であることも之を以て明かにすることが出来るとおもふ。

高についてもさうである。たくといふ動詞の将然名詞法であることは疑がなからう。勿論今のたくとたかしとの意味の内包には一致しない点がないでもない。けれどもこれは

時代と共にふたつの語にふくまれてをる思想が互にへだゝつて来たので、この考を以てたくとたかしとの關係を思つてみれば、たかしがたくから出たといふことは決して考へがたくない。

優ヤサといふ語は、しく活形容詞の語根でありながら、体言的なのがめづらしいので、この優は勿論やすといふ下二段の動詞のあ母音をふくんだ形をとつたもので、四段動詞が諸種の動詞の根源であるといふ説がなり立つとすれば將然法というても差支はなからう。

(これについては卑見もあるけれど、論が多端にわたるのをさけて後にいふことにする。
) やさ男ガタやさ形ガタというても、まだ全くはやすといふ語の意を去りかねてゐるのはおもしろい。

次に、浅アサは動詞のあすといふ語の將然法とも見るべきあ母音をとつた形で、河があさいとか水が浅アサいとかいふのは、水をあせるといふ思想をばふくんでゐるので、山が浅アサいとか心があさいとかいふのは水が浅アサいといふことから、類を推して用ゐたのにすぎないのである。

深フカといふ語については水が深いといふのが元か、夜が深いといふのがもとか、容易に断定することは出来ないが、何れにしてもふくといふ語であるにちがひない。今では夜ふ

くとはいふけれども、水ふくとはいはない。ある人は夜のふかいといふのは漢字の深夜から胚胎せられたものといふけれども、「うば玉の夜のふけゆけば」といふ様な語つきはそんなに直訳的にもきこえない。この夜ふくといふ方をばもとゝしてふかしをとく場合には極簡略に説明する事が出来る。けれどもさうばかりはいふことが出来ない。水のふかい事をばふくといふ様にいうた古動詞があつたらうとおもふけれども、今は断定することはできない。(つけていふ、ふく・むといふ語はこのふくにあるひは関係がありはすまいか。河内の旧讚良郡に深野とかいてふこ「くふく」のとよむ所がある。この辺は川水のために、古くは沼地であつたので、この地名がその水とか泥とかのふかゝつたことをあらはしてをるのは勿論である。けれどもかういふことは音韻の転訛といふことによりてつぶされるから、さうくふかいりはすまい。)

近は、^{チカ}つ・くから出たものらしい。近・つく、つきく・し、つ・ぐなどみな密接近似などいふ意がある。

因にいふ、後撰集に、関こゆる道とはなしにちか乍ら年にきはりて春をまつかなといふ語法は注意にあたひすると思ふ。

べらなりのべらをばめらの將然法の音転としたならば、これをも体言といふ説の一つの材料に供することができる。なりは動詞の終止と連体とにつく外は多くは体言につくのであるといふことに注意せねばならん。形容詞の將然段は普通の文法家は連用言のうちにこめてしまふけれども、よけとかあしけとかなけとかいふ語が已然にも將然にも用ゐられてゐる。しかし、これはありといふ語の融合してをるといふ説があるから、この場合には姑くこれを措いておく。

以上論じたところで、用言なるものは將然言が名詞法を有してゐるといふことがわかつたとおもふ。尚いろくの用言をもつて来てその語根について考察したならば一層明かになると思ふ。

うか・るといふ語は、うかくといふ語ある如く、うかは体言的に扱はれて受身のるがつけられてゐるのである。これを使役の意味にうつしてうかすとしても、やはりうくといふことをせしむといふ意味にするのである。なくがなかるとなり、なかすとなるのもやはりなくといふことがせられるとか、なくといふことをせさすとかいふ意味になるのである。同様にくだ・るとくだ・すはくだが語根となつてゐるので、これもやはり將然名詞法であ

らうとおもふ。即ちくづといふ語があるべき筈である。然しながら、これは甚だ耳遠くてそんな語があつたか、なかつたかもわからぬ。けれどもこれを発音上親族的の關係あるや行にうつしてみれば、くゆ（崩）といふ語は明かに下の方へあるものがおつることを示す、即ちくづといふ語の存否如何に係らずくだといふ語はくゆといふ語とも似たものであるといふことがわかる。くづといふ語について少し考へてみると、人はくさるといふ意味ばかりとおもつてゐる。けれども雨をくだしといふことのあるのは卯の花くたしといふ語によつてもわかる。即ちくたしは従来卯の花をくを雨にぬれるといふ事に用ゐてるさうで（庄内方言考）、卯の花くだしといふのはつまり卯の花雨といふ意味であらう。

おは（負）・るとおは・すはおふといふことを、またるとすとをもつて受身と使役と両様にはたらかしたのである。ゆか・む、ゆか・じ、ゆか・ず、ゆか・ましなどゝいふ場合にこのゆかには体言的の意味が全くない様にもおもはれるが、よく考へてみればそこに体言的の意味がどうもあるらしい。

助動詞のけり、けんがけを共有してりとむとによつて時のちがひをあらはすが如き、けに過去の意味があるのでりはさし示す語であるから、けりはたしかなる過去の時をあらはし、むは想像であるから過去のある時を現在から想像する。このりとむとがけに連続する具合、

らむとらし、めりとべしと、なりとなむとの如き、皆ひと綴くについて意味がある。けれどもどういふわけでそれがまたむすびついたのか、これをその間に観念がはたらいてした仕事であるとすれば同様のことが、ゆか・む、ゆか・じ、ゆか・ず、ゆか・ましなどの上にも応用が出来る筈である。ゆかなんの如きは、ゆくといふ事（即ちゆか）を希求する意味のなんがついたのであるといふことはあながち無理ではなからう。

さわ・ぐ、なや・む、たゝ・む、あ・ぐ、かゝ・ぐ、さか・る、うま・る、つが・ふ、ゆか・し、いとは・しなどもまた同様の事がその語根についていはれると思ふ。

■連用名詞法

連用法に名詞法のあることはいふまでもない。たゞこゝに連用名詞法の語が他の接尾語とむすびつく事についてのべて見たい。

しに・す、ゆき・すの様なのはかれ・す、おい・す、つき・すのしに、かれ、つきが連用言であることを証拠立てゝある。これらのしにす、ゆきす、かれす、おいす、つきすなどは体言としてすをうけてゐることは勿論であるとおもふ。

よぎ・る、わび・し、こひ・し、口語のゆれ・る、うけ（浮）・る、おき・るなども将然法ではなうて連用法であらうとおもはれる。

■終止名詞法

終止法の名詞となるといふことは従来多くの文法家にみとめられてをらぬ。けれども歴史仮字遣に於てすまふ、かげろふはすまひ、かげろひの音便であるというてすまう、かげろうと訂正した人を見ない。本居翁は字音仮字用格に於てあさちふとかかしふとかのふはおふの略であるというてゐられる。これが連体言であるとしても変である。翁の意はやはり終止言の名詞法をゆるしてゐられたものと見てよからうとおもふ。

全体終止言と連体言とをわけるのは上下二段四変格に応ずるため、終止と連体とが区別あるのは職掌のちがひによつてある動詞はその形式がかはる、いはゞ形式の上の名にすぎない。形式の上の名であるものを直ちにとつてきて、その形式に於ては何らの区別もないある種の動詞について、これは終止だとか、これは連体だとか、名をことにしてよぶのは変なことである。四段活用の一元から諸種の活用が出来たものとすれば、そのいまだ四段活用ばかりの単純であつた時代には勿論終止と連体との区別がなかつたのである。チャンバレン氏は古四段活用は終止と連体とが形をことにしてをつたのであるが、動詞全体の傾向が連体言と終止言とをば混同しようとするので、四段活用はすでにこれをわかつたない。上下二段言も俗語に於てはこの区別を失うてをる。故にたゞこの一点に於てのみ二段言は

四段言よりも古い形を存してをる（日本文法論、孫引）というてゐるけれども、比較的古い現存してゐる文献のうちで、連体言が終止言と同じ形である即ち終止言と連体言とはもと／＼区別のあつたものでないといふことを証明してをる事実が多くみいだされる。これらの事實は日本動詞の最古形を示したものでないかも知れぬが、今日われ／＼がそのあとをたどることの出来るものゝうちでは最も古いおもかげを存してをるものといはなければならぬ。（古事記の哭伊佐知流〔連体言はいさちなることは啼伊佐知伎也とあるのをもつてもわかるし、いさちるは上に何由ナニシカモ以とあるから連体言であらうとおもはれる〕は、或は古活用が今日の文献に存してゐる上から見ても古い形であらうとおもはれる四段活用よりも前の時代のかたみをたゞ一つ古事記の上にとゞめてゐるのではあるまいか。然ながらこれは到底容易に断言せられることではない。）いくたちいがこれらの場合には省かつたのであるといふかも知れぬけれども、以上は九牛の一毛たるにすぎないので、古い所ではたくさん見えてゐる。これらを悉く省かつたものであるというたならば、即ちとりもなほさず文法は事實の上に基礎をおくべきもので空想の立場から考へ出すべきものではないから、つまりは一步をゆづつてをもつた形が連体法の古形であつたといふ考をいれるとしても、事實は事實であるからそれを以て古文献にいでたるをもともなはない終止形

と同じ形の連体法をうちくづすことはできない。即ちむしろ連体法の古形は（われくが今日に於てさかのぼる事のできる限りの）終止言と同一形式をそなへてをつた。とりもなほさず終止法と連体法とを包含した終止法（？）であつたのだといへるとおもふ。

みたまのふゆといふ語はこのふゆが殖ゆの意であつて、即ちみたまのふゆるであると考へて見てもおちつかぬ。やはりふゆをばふゆる事といはずにふゆというた所に勢が存してをるのである。

雫はしづくの終止法か連体法かは分別することが出来ないけれども、やはりまた終止と連体とをば包含した終止法から出たものであると考へるが適當であるまいか。

古浄瑠璃の四天王高名物語其の他にやまふの道とかやまふのためにかいふ語が見えてゐるのは、やはりさういふ所から出たのではあるまいか。といふのは京阪地方の語では連体名詞をば（いの韻をふくんだ）うの韻にかへることをさけてゐる（たゞの連用法にはうの韻にかへて用ゐることは最も多い）。たとへば東京でおむこうといふ所を大阪ではむかいさんといふ。この傾向は古浄瑠璃に遠からぬ時代の作物についても見ることができるのであるから、これはやまうではなうてやはりやまふであらう。

けれども連体法と終止法とがある活用によつて別々な形式をとつたのも古いことであるか

ら、この推論をすゝむるについてやはり別々にしておかうとおもふ。

また今日でも、あ母音をもつて居ない上下二段活下一段さ行変格の動詞が他の接尾語と結びついて用言となる場合にあ母音をふくんだ形をとるのは音韻の変化又は四段活、な、ら変格を類推するのであるといへばそれまでゝあるけれども、動詞活用の古形を論ずる場合に注意すべき事柄たるを失はない。

形容詞から出たよしむ、かなしむなどはよし、かなしで体言になつてをるので、よ・む、よみ・す、かなし・がる、かなしく・すなどゝ同じ意味で、とにかく終止言の名詞法である。

動詞について今少し方面をかへて考へてみると、つるといふ語が終止段からすをよんでつる・すとなる。上二段のふるといふ語がすをうけてふる・すとなる。ゆる・すは下二段のゆるから出たのである。

下二段のなゆ「に傍線」といふのはうむにぶがそはつたものとおもはれる。前にいうたくづる、くづすのくづはたしてくゆとおなじ意味の動詞であつたとすれば、また終止法名詞を証拠だてゝあるのである。同様にさくむの語根はさくの終止法名詞であらう。

すぐす、おこす、おこる、はるく、こもる、およぼすも同様にすぐ、おく、はる、こむ、

およぶの終止法名詞に種々の接尾語がついたものといふことがあきらかである。

かしつく意のいつくの終止法がしをよんでいつくしとなり、つゞいてうつくしに転ずる。

おそるの終止法からしをうけておそろしとなる。さもしといふ語は、今日さむといふ語は見るによしないが、その連用法名詞とみられるさみにすがついたさみすといふ動詞があるのをみれば、そのさむといふ語の終止法でしをよんだものにちがひはない。につこ・らしいといふ語が古い大阪ことばのうちにあつた。これはあほらしいとか、いやらしいとか、きたならしいとかの推量の意ではないらしいがにつくといふ終止についたのである。つぐ・なふはつぐといふ終止法名詞になふがついたのではなからうか。ひこ・つら・ふはひくの終止言につらふがついたものであらう。かういふ様な意味あひから接尾語として最も多く用ゐられるが終止言について今日すぐといふべき所にすぐるといふたり、とくといふ所にとくるといふたり、すといふ所にするといふたりしたい様な氣がするのであらうか。また和歌にかゝりのない連体どめが多くおこなはれたりするにいたつたものであらうとおもふ。

■連体名詞法

前來說いて来た意味における連体法の体言はあるべき筈のもので不思議はないのであるが、

これは多く終止法とまぎれる様で、慥に連体法の体言から用言にうつつたものであるとみるべきものがみあたらない。(但、分詞として用ゐたものは別である。)

めづらしといふ語は或は一見した所ではめづるといふ連体言から出たものらしく思はれるけれど、事實はさうでない。めづらのらはさきにのべたやとかは、かとかと同類の語でめづをばかくて体言として、それにしをばそへたのである。この様に終止と連体とがきはやかにわかれてをる諸種の活用には、連体から他の接尾語をよんで用言となるものが見いだされない。四段活用その他終止と連体とに区別のない活用について、連体名詞を求めようとするのは出来ない相談である。全体連体段は所謂分詞法があるのだが、分詞といふものは体言につかはずはなれずといふ状態にあるので、正しくはこの分詞法には弓爾波はつくけれども、用言接尾語はつかないのである。この段に合名詞法(熟語法)をおくけれども、それは今日ではむしろ連用法が合名詞法としては完全にはたらきをしてゐる。一体合名詞といふのはある用言と体言とがつゞくのではなうて、ある体言と体言とが接するものである。たるき、しらぬひ、くるまき(車木の説あり)などは今日の頭から考へてみると、さしみとか、うきふねとか、よりうど、かいふ様にたりき、しらず火、くりまきとする所である。

しかし形容詞となると少しく面目がかはつて来る。よきとかあしきとかで体言になつて居るけれども、よきとかあしきとかゞ他の接尾語をよんで更にまた用言をつくることはおぼつかない様におもふ。但し金沢先生は、よかり、あしかり、よけれ、あしけれをよきあり、あしきあり、よきあれ、あしきあれと様にいうてゐられる。これはアストン氏の語根についての考を採用せられたのではあらうけれども、卑見はやゝこれと趣を異にしてゐる。語根はアストン氏の如くゆきとかうけとかいきとかみとかいふいの母音に近いものを以て終つてをるとする考は、つまり名詞語根説には一致はしてゐるけれども、それは後世の考をば前にさかのぼらしたので、恐らくはさうではなくて、今日の存在してをる文献に徴して考へてみると未熟ながら下の様な結論に帰着するとおもふ。

(ちよつと断つておくが、おほきしといふ語は、おほきといふ連体名詞法に形容詞接尾語がついたのだとおもはれるけれど、おほならばとかおほにとかいふおほにけとおなじ系統のきがそはつたので、さや・け・し、しづ・け・しなどと同様であらう。)

「くむ(まし)

「くぶ

むつ「る

― 睦月

「睦言 すめらあがむつ かむろぎかむろみ

「め (探女)

さぐとる

―

「(が)す

(ほ) 「ひ (葵)

あふ とる

―

「(ほ)つ

「(釣錘)

― 枝

― 輪、鞍

―

—「ごゝろ

しづ「ト「おり

—「く

—「む

—「る

—「か

—「

「「や

「「しね

—「

—「ち

うる「ト「せし

—「ふ(はし、ほす、ほふ)

「「む

「「(が)せを

—トづち (迦具土神) (記 亦名謂火之炫毘古神)

かぐト「やひめ

— 「や (やか、やく、やかし)

— (が)ト

「 「よふ

「ふ (はし)

たト

「よふ (はし、はす)

「づ

— 「ぬ

ト

い ト「(ゆ)く(ありくはあい)へゆく(なり、あるくはあゆく)世、あゆむのゆむ如

何)

「る

「か (—し)

おろト「おろ

ト

一「おぼえ

一「つく

うろトたへる

一「が来る (大阪語)

ト

「おぼえ

「ふ

一(そ)ぐ(かし、かはし、かす)

(いす)ト(そ)し(しむ)

いすト(そ)はく

一「すぐ

一「(そ)ぼふ(くいそぶ?)

一「ろこふ(くいそろぐ?) (大殿祭祝詞

神たちのいすろこひあれびませ

を云々)

— 「く(かし、くる)

そゝ
ト

「のかす(くのく)

「「む

すゝ
ト

— 「(さ)む(まし)

「ろ(漫)

「く

— もつ

— 「(くのむ)

「「もる

(こ) — めく

うぐ ト「なふ(はる 集伝 大祓祝詞其他)

むく — 「と

(も) (こ) — つく (け) し (

「めく

— む

— むくし

「(も) (こ) ぶ

「(ば) る

あぶ

「る

「なふ

うづ

「なし

「た — く とを

わ — くとく

—

「ら 「(ば) ら

むつ、さぐ、あふ、しづ、うる、かぐ、たゝ、いす(いすゝ、すゝ)、うぐ(むく、もこ)
)、あぶ、うづ、わゝ、の如き名詞ともつかず動詞ともつかず、八品詞のうちでは先づ感
 嘆詞に近い体言とみるべき語根が其まゝ又は種々の接尾語の連続によつて動詞とも形容詞
 とも副詞とも又名詞ともなるので、かういふところから(動詞の終止言がうの韻ではつ
 てる事が共通語根のをはりに多くuをみいだすのに似て居る)、

「す (将然か音転か)

—(や)ト

—「む

なゆト「む

—ト(よ)ぶ

「(よ)る なよるは馴寄也といふはなゆ・ると説くに如かず

(ぶ)「す

のぼト

「る

「む

かくトす (くさふ)

— (こ) ぶ

「る

(ぐ) 「む

なご ト

「る

のなゆ、のぶ、かく、なぐ、の如き終止言が体言となつて接尾語をうけたものらしく思はれる。これらが体言的のあつかひをうけるべきことは前にも述べたが、なほ肩ぐ、あぎとふ、あきなふ、時めく(心ときめくのときは今は濁つてどきつくなど、いうてゐる。此処の時は其とは違つて時を得る、ときめく等の時である)、はらむ、香ぐなど、いふに徴して明かであらう。

連体段について述べるつもりが意外にわき路へ這入りこんでしまつたが、ひつくるめていふと、連体言に他の接尾語を加へて、用言とするといふことは疑はしい。ただ形容詞の連体言についてはわが師は之を認めて居られるけれど、よくあり、あしくありと連用言からありを受けたものと考へる方がどうもまさつてゐる様に思ふ。なる程あり、す、うといふ様

な語がい母音に關係のふかい段につゞくといふことはわかつて居るけれど、これを拡張してよきあり、あしきありと説くことはさかしだてする様ではあるけれど師説ながら服したい。

あり、う、す、むの複合即ち今日でも稍その語源の意を認められる接尾語の外にも單綴のものでは、く、つ、ぬ、ふ、む、ゆがある。ゆとむとは語源のおもかげをおぼろげにみる事が出来るが、く、つ、ぬ、ふについては今日のところでは音義をとくほかはない。はたして複合のために用ゐる動詞があり・う、す、むばかりであるとはどうもいへない様だ思ふ。況やずつとはじめにならべておいた諸種の接尾語もゝとはそれ／＼やはり独立の用言であつたと考へられるにおいてをやといはねばならぬ。

つまるところ用言の語根は古くはい母音でをはるものではなうて、う母音でをはる語であつたのが、終止段が此に似てをるから、そこで語根となることがあるので、そのう母音でをはつてゐる語根といふのはまへにいうた通り動詞でもないまた名詞でもないが、また動詞にも名詞にも融通して用ゐられる語で、形式の上からいへばまづ体言とでもなづくべきものであるらしい。

いく(生)といふ語は息をはたらかしたのだと大矢透氏が説いてゐられるけれども、むし

ろ自分は名詞でもなく動詞でもないいくといふ語があつてそれが直ちに活用したのであると思ふ。これをかりに渾沌時代と名づける。

いく 渾沌 「生太刀」(古事記)

「名……いく……いき

時代 「生弓矢」

「一いこふ

生日の足日(出雲国造神賀詞) — 形 いかし穂

生井(祝詞に多し)

「動 生く

右の表に示した様に渾沌時代に於けるいくは形容詞的にも動詞的にもまた名詞的にも見られる。いかしほのいかしは普通に敵の意にとくけれど、之はいきくした所をいうたものでそのいきほひのある所から敵の意味が出てきたのであらう。それについてはいきむとかいきほふとかいふ語を参考すれば、その間の消息がやゝうかゞはれる事とおもふ。

神賀詞

「とよさかのぼり(朝日の——) 大祓、出雲国造

「さかト

| 「さか木

| 「さき(幸)」

| 笑 | — はふ—

さく 渾沌(榮井)^{サク} 下さく 下さかゆ |

時代

ト?

「咲く

.....ト

「さかる

ト

なども榮井の時代にはまだ動詞とも形容詞とも名詞ともならなかつたのであるが、いの母音をよんで幸となり、またゑみさくなどの動詞となつて活用をもつてきたのである。さきにあげたむつについてもかくについても、この渾沌時代を想像することが出来る。いくとかさくとかむつとかについて尚一つ考へてみると、渾沌時代のことは或は子韻でをはずてをつたのであらう。即ちうがそはると動詞となり、いがつくと名詞となる。あの母韻が

つくと主に副詞または形容詞となる。

「ます十ら十雄

勝

ます 渾沌十天益人

増

「まそ十け・し（まぎ十き・く） 正

益荒雄と記紀万葉にかいたのは借字で字によつて、たけ／＼しい意があるとするから小田のますら雄の説明が出来ぬので、ます十ら十雄であつて達者な男といふ意にとれば不思議はない。まそ十け・しといふ語が達者などといふ意を暗示して居るではないか（兵部令にちからびとの事を健^{コンテイ}児と宛てたのにも此辺の消息がうかがはれ相である）。天益人の如きも黄泉津平坂のことゝわたしの時に、

汝国之人草一日絞殺千頭愛我那邇妹命汝為然者吾一日立千五百産屋是以一日必千人死一日必千五百人生也

とあるのにかまけて、大祓の「国中成出天之益人等」とある語をみな死ぬるよりも生るゝ数のます意だとして居るがどうもおちつかぬ。神々の御ちかひによつて、まそけく日々にいそしむおほみたからの意と解する方が適切であらう。

以上は一つの仮説にすぎぬ。其語の渾沌時代から生れて来る順序有様等については、或は

表に示した所に不完全な点あやまつた点がないでもなからうとおもふ。

今一つこの連体言について考ふべき事は所謂延言の一種々々を語尾に伴うたものについてある。いはく、申さくは将然言からくをうけたものとも見られるけれども、これは恐らく音転であらう。く延言が連体法から出る証拠は万葉の わが背子を何地ゆかめとそきたけのそかひにねしく今しくやしも、勢語の 桜花ちりかひくもれおいらくのこむといふなる道まがふがに 等の歌をみてもわかる。これらは、ねしこと、おいといふもの（おゆること）といふ事であるから全くの連体法で、これを（ねし、おゆら）体言ともみられぬでもないが、よほどくるしいと思ふ。

つけていふが所謂く延言は、うの韻のある所から動詞として用ゐられることもあるやうである。例へばいそはくはいそふの所謂延言である。それが四段活用になつた如き。

■ 已然段について

已然段についてはいまだ一つの体言らしいものも見いださぬ。全体已然言と命令言とは形容詞に於て一見してわかる如く、用言の諸活用のうちで何だか特別なものゝ様である。

将然連用終止〔連体〕〔已然〕

もし四段一元が事実ならば終止と連体とは一つになる。そして上下二段活上下一段活を見

ると、将然と連用にも四段の終止と連体に於けるが如き関係が見られる。動詞活用古形については考のまとまる目をまつて、今はたゞ動詞形容詞活用の各段に於ける体言の有無について卑見をのべて、更に接尾語がこれらの体言について用言をつくることをいうたまでである。

今話をはじめにかへして、

いとほ・し　いとほ・し　よろこば・し　よろこぼ・し

ゆら・ぐ　ゆる・ぐ　およは・す　およほ・す

等について考へてみると音韻の転とのみもおもはれぬ。どうもある点までは音転といふことも考へて見ねばならぬが、将然と終止とがおのゝある接尾語をよんで他の用言を再びつくつたものと考へる方が前々からのべた通りでよきさうである。

こひ・し　さび・し　わび・し

ゆき・す　死に・す　かれ・す

よぎ・る　ゆり・る　ゆれ・る

の様なのは連用法体言から出たもので、前項の将然言や終止言から出たものよりは体言的の意味は深い様である。もしも将然言と終止言とがおのゝある接尾語をよんで用言とな

つたのではなくしてどちらか一つは音転によりてなつたものだとすれば、自分は人の将然言の方を元とするのに対して、むしろ終止言を根本とすると主張せうとおもふ。もしも将然言をもとゝすれば、ねしくとかおいらくなどのく延言はどう説明するのであらう。ねしむ、ねし（将然言）、おゆるむ、おゆりなどゝいふ珍妙な活用があることをも肯定せねばならぬ。自分は前に終止と連体との親族的関係のある事についていうておいた。それによつてみても、むしろ終止といふ方が将然といふよりもまさつてをりはすまいか。この場合に於て終止言に連体の意味があるというても差支はないけれども、決して形式の上に混同してはならぬ。形式の上ではむしろ動詞の連体言が体言的になつて接尾語をよぶといふよりも、連体終止の二段をかねた終止言が接尾語をよぶのである。即ち活用が一元に帰するとすれば、今の四段活用の様に終止連体うちこめて終止とする様な活用でなければならぬのである。さなくては、今の上下二段諸変格の連体が接尾語をうけて用言とはならず却つて終止からうけるなどは奇妙な事といはねばならん。

かういふわけで、ある点までは連用もまた将然言にこめて考へることが出来る。

さうすれば問題は大体に於て将然と終止との上のこるわけである。

くりかへしていふが、自分は音転といふことをば認める。けれども此れを極端にひろげて

考へることは出来ない。自分とてもどれもこれも終止と将然とからおのゝ別に出発したものはいいはぬけれど、これを悉く一元に帰せうとする意見には賛同の意をあらはすことはできぬ。かうして、

つくるふ は つくるの終止からふをうけたもの

かたらふ は かたるの将然からふをよんだもの

かこふ は かくの終止にふがついたもの

たゝかふ は たゝくの将然がふをうけたもの

であると説かうとおもふ。(かたらふをかたりあふ、たゝかふをたゝきあふであるなど、いふのはどうかとおもふ。一体反切をいろゝの方面に應用した事は明かな事実で、記紀万葉あたりにもこの反切の應用が見えてゐる。しかるにやゝもすれば占ふウラといふ処に占合、占相、たをやめに手弱女などゝあて字を用ゐる。うらふ、かたらふ、たゝかふのふにうつてゐる語のやうにあつかうたのはおもしろくない)

金沢先生は延言考において、韓語の動詞形容詞に二つの名詞法(※、※)がある事とわが形容詞にばかり E. E. の二つの名詞法がのこつてをる事とから推して、動詞にもm形の名詞法が昔はあつたので、ひろき、しろきがひろく、しらぐとなるやうに、ひろむ、しろむ

はひろみ、しろみの名詞法から動詞にうつつたのでこのm形が變じては行延言と称するものが出来たのであらう、というてゐられる。

けれども考へてみれば、延言と称すべきものは決しては行とか行とばかりにあるわけではない。五三の韻をもつた名詞法から動詞となるといふ事から、先生の動詞の語根をいゝの音に關係ふかきものを以て定められてゐる立場から見れば当然ではある。けれども、よそ・る、ふる・す、まさ・る、うこも・つなどはどう説明すればいゝのであるか。

よすがかたらふとかみまくとかにふ、くがつくと同じ様にるをうけてよそるとなる。

ますの將然からるに接してまさるとなることはみまくとかかたるふとかと少しも差異はない。同様な事がうごもつ、うごもちの上にもいはれる。うごむはむくむとおなじことばで之にる、つがついて出来たというて何の差支をも見ない。

ふる・すはふるといふ動詞にすをつけたもの、たる・むはたるにむがそはつたもの、ゆる・ぶはゆるにぶがついたもの。

かういふ風にのべて来ると、延言と称するものは決してく、ふにかぎらぬことが明かである。

更に注意すべきは二重にこの作用をするものがあることである。即ち、

よそほふは

よそ・ほ・ふくよそ・ふくよす

ひこづろふは

ひこ・づろ・ふくひこ・づるくひく

の類である。

更におもへばゆか・るでもゆか・すでも、うか・るでもうか・すでもやはり所謂延言だと称する事が出来る筈である。

延言と称する名称の不可なることは用言のある活段を体言と考へて之に接尾語をつけて用言としたので、決して語尾を延べてつくつたものでないことを以てみても明かである。

終につけそへておくが、これまで延言と称せられたる、ふ、その他く(みらく、こふらくのくではない)、す、つ、ぬ、は、ゆ、る、う(ぐ、ず、づ、ぶをも加へて)及び二綴或は二綴以上の接尾語について、その意を考へてみれば面白い結果が得られるとおもふ。勿論には有の意味があらう、すには為の意味があらう、うには得の意があらう、むには見の意味があらう、けれども、る、す、む、の説明もなほそれだけでは不完全である。その他く、つ、ぬ、ふ、ゆをはじめ、多綴音の接尾語についても考へてみる必要がまだくあ

る事とおもふ。

く

つな・ぐ (綱ぐか列ぐか)

かゞ・や・く、おどろ・く、うご (くむく) ・く、うな・く、さや・ぐ、そよ・

ぐ、そく・く、せくち・ぐ、よろ・ける (くく) 、あち・ぐ (あちく)

こほろぎはこほろ (擬声) ぐの名詞法か

はらく・く、とろろ・く

す

(き)

—
—

すぐ・す、たぐ・す、はや・す、かく・す

のほ・す (延ぶ、※へ高く)

其他助動詞す

つ

たぎ・つ (おち—、水のたぎち)

もみ・づ (もみは色にや)

い・づ (いる、いぬ、いく)

ぬ

ふさゝぬ、かたゝぬ

つら・ぬ、つか・ぬ

な・ふは此ぬの二重発展にて其経路必ぬを経たるなり

かゝ (屈) ・なふ、たゝ・なは・る

む

しづ・む、なや・む、下・む (大阪語)

かく・む、むつ・む、しわ・む、そば・む、うる・む、せ・む (狭む)

あが (上) ・む

(よみ・す、さみ・すも同じ名詞法)

ゆ

こゝ・ゆ、むく (向) ・ゆ、おぼ・ゆ、見・ゆ、たか・ゆ、あま・ゆ、煮・ゆ

ふ

ちか・ふ、ねが・ふ、かこ・ふ、つた・ふ等
る

あらは・る、そゝ・る、まく・る、あか・る、こも（くこむ）・る、かく・る、
よす（くす）・る、むつ・る、まさ・る

うは居^ウ也

姓氏録に、伴信友の高橋氏文考注に、稚湯坐連^エあり。うゝす・う、うま・う、み
な位置を定むる意あり。崇神紀倭迹々百襲姫命の薨ぜらるゝ条には、爰倭迹々姫
命仰見而悔之急居（急居、此云菟岐于）則箸撞陰而薨。

この推論をどぢむるにあたつて、この篇の進行中に自然先達諸家に対して礼を失した点が
あつたならばひとへにその寛容を希ふのであります。

青空文庫情報

底本：「折口信夫全集 12」中央公論社

1996（平成8）年3月25日初版発行

※題名の下に「明治四十一年頃草稿」の表記あり。

※底本の題名の下に書かれている「明治四十一年頃草稿」はファイル末の注記欄に移しました。

※複数行にかかる中括弧には、けい線素片をあてました。

※三字下げの箇所は、欄外に書かれた注記です。

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2009年8月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

用言の発展

折口信夫

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>